

基調講演

子どもとつくる地域づくり—暮らしの中の子ども学—

加藤彰彦（沖縄大学 名誉教授）

皆さん、こんにちは。今日お集りの皆さんは、地域の中で、色々なご活動をされている方々と伺っています。本日は、「多世代」という事を軸に、皆さんとじっくり考えようと思います。産まれてから年を取って亡くなるまでずっと人生は流れています。

中国では昔から、人生を春夏秋冬4つに分けて考えてきました。年齢でいうと、おおよそ25歳ずつです。0歳から25歳位までが「学生期」と言い、将来に備えて学ぶ時期。25歳から50歳位までを、「家住期」といいます。家庭や仕事に忙しい時期ですね。人生の中で一番大事な所です。それから50歳から75歳位までが「林住期」といい、仕事を離れて、本来自分が本当にやりたい事をやる時期です。ここには、地域活動も含まれます。75歳から100歳までが「遊行期」と言って遊ぶ時期。これが中国では言われています。実は、これは日本語にも導入されています。25歳位ずつ変化するという事で、「春が青春」「夏が朱夏」「秋が白秋」「冬が玄冬」とこういう風な言い方をしています。一般的にはこうなのですが、全体が長生きして時代が少し変わってきていますよね。例えば夏目漱石なんかも、当時50歳ってずいぶん長生きしたのではないかなと思います。宮沢賢治は30代ですし、石川啄木なんて20代で亡くなります。太宰治だって若かったようですから。そういう時代でしたが、今は平均寿命が延びて80歳位ですかね。女性だと85歳以上いきますし、男性でも80歳位です。そうすると、訂正しなくてはいけないなと思いますね。「学生期」は、25歳位までと言いましたが、30歳位までどうですかね。30歳を15歳位に分けると、前半は子ども、後半は青年というようになります。

そう考えると、子どもが産まれる事って、実は、長い人生のスタートの所にいる事を、分かっていただけだと思います。そういう長いスパンで、子どもが育っていくのを見ると、「何が一番大事なのか」「子ども時代に、どんな事を身に付けたらいいのか」「生きてく上で必要な事は何なのか」「人生で一番大事な事は何なのか」そういう事を考えます。これに合わせて、今日は、考えていきたいと思います。

自分自身の人生75年を振り返ると、これから間もなく林住期から遊行期に入ります。僕の人生の中で一番大事なものは何だったかと、はたと考えることがあります。皆さんはどう思いますか。なんだったと思いますか。僕は、やはり「出会い」だったと思います。どんな人に出会ったの

かという事が、自分の人生を決めてきました。最初は親です。他にも色々な出会いはありますが、次に先生に会います。そして、誰か異性と出会い、家庭を持つ。異性との出会って、物凄く大事な事ですね。結婚というのはすごく大きな事だと思います。ここまでくると、「ああいう人に出会えて良かったなあ」とか、「あの人に会わなければ良かったなあ」とか色々あるかもしれません。とにかく、どんな人と出会ったかという事が、自分の人生を作ってきました。これから先もそうだと思います。今回の主題である「子ども」に視点を当てて考えると、これから先々、どんな大人に出会うかで、彼らの人生が変わっていきます。僕自身、「子どもの時、あのおじいとおばあの言葉が忘れられない」「お腹がひもじかった時にもらった、おにぎりのおいさが忘れられない」というような事があります。

では、ちょっとずつ僕の人生を振り返ってみたいと思います。

僕が産まれたのが1941年11月です。僕は東京の墨田区で生まれ、1週間後に戦争が始まりました。この戦争で、身内を亡くした方はとても多く、日本人だけでも310万人が亡くなりました。そして、世界では2千万とも3千万ともいわれる人が亡くなりました。

僕の最初の出会いは「死」です。1945年3月10日の東京大空襲でした。当時3歳だった僕は、防空頭巾をかぶって母と、生まれたばかりの妹ナオコと防空壕に逃げこみました。この日は、大変大きな空襲が来るというので、後から後から人が逃げて来ました。最初は、外の空気を吸う為入口近くにいたのですが、もっと入れもっと入れと押されて、結局一番奥まで行ってしまいました。息苦しく真っ暗な中、近くで焼夷弾がパーンと落ちると、上から砂がバラバラと落ちてきます。どんどん息苦しくなりました。さらに、防空壕に入ると妹がよく泣くのです。こういう時、泣き出すと周りの人が、気が立ってしまうので、「静かに静かに」と、お守りをしました。

数時間後、空襲警報が解除され、防空壕から出ました。出てすぐ、周りには丸太棒が転がっているように見える、真っ黒な遺体がいっぱいあって、防空壕に入れなかった人達が皆焼け死んでいました。家も皆無くなっていて、隅田川には、飛び込んだ人の遺体が浮かんでいました。母は帯を降ろして、「妹を見てほしい」と言いました。僕は、泣き虫の妹の鼻を摘みました。摘むと「うぎゃうぎゃ」と言って面白かったのです。しかしその日、鼻を摘んでも何の反応もありませんでした。この事を報告すると、母はびっくりして妹を下ろし抱き抱えました。それでも妹は動きませんでした。原因は、母の背中に押されて、抵抗出来なくなっ

た事による窒息死です。その時の母の姿は忘れられないですね。「お医者様、この子を助けて下さい！私の娘です！助けて下さい！」と大声で泣き叫んでいました。

これが、僕の人生の中で一番最初に出会った「死」でした。だから妹との時間はとても僅かでした。今思えば、あの戦争で妹や子ども達が、理不尽な死に方をしてしまった。あの戦争がなければ、これからの人生、僕と一緒に大きくなり、沢山友達を作り、結婚をして子どもを育てていたり、色々な事がやれたはずだ。だから、これからの子ども達は、二度と同じ目に合わせたくないという思いが、僕の中にスッと入ってきました。これが、「生涯、これからの子ども達を何とかしたい」という、ライフワークに繋がりました。

戦争が終わり、「二度と戦争があってはならない」という事で、新しく生まれたのが日本国憲法です。小学校に上がったから、先生は憲法の話をよくしていました。1つ目は、第9条ですね。「これからは、戦争をせず軍隊も皆持たず、話し合いをする事。何かあった時は、喧嘩をするのではなく、皆で話し合う時代だ。だから、皆で話し合って解決する。他の国とも戦争せず、互いに話し合って仲良くし、共に生きていく事が大事だ。」これが、僕の最初の記憶の中にはっきりと残っています。これが1つ目。

2つ目、憲法25条というのがあります。『健康で文化的な最低限度の生活を保障する』、これは、「これから皆が助け合い支え合う事も必要だが、同時に、困っている人がいたら皆で助けよう」という事です。僕達は、当たり前のように思いましたね。「クラスの友達が病気になったら、皆でお見舞いに行く」「運動会の時、足を怪我した子がいたら、皆で抱っこして助け合う」「辛い思いや悲しい思いをしている人がいたら助け合う」これが2つ目。

3つ目、憲法26条「教育」の条項です。勉強したい、学びたい時は、差別がなく何でも学ぶ事が出来る。従って、義務教育期間中は、無料で学ぶ事が出来る。これはつまり、「学びたい時に学べる」という事です。皆で学び合って生きる事、これは大事な事なのだという事を、その時学びました。

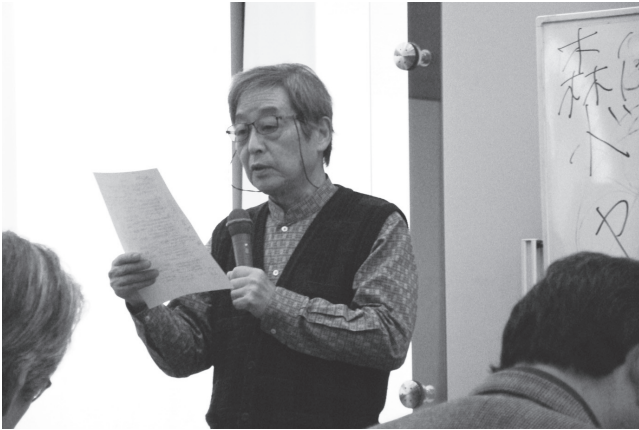
僕が、最初に通った小学校は、父の実家がある横浜でした。東京は全部燃えてしまい、父の実家にある藁葺小屋に住みました。学校は、地域の分教場でした。今は、分教場はありませんが分校の事です。その分校に通う事になったのですが、当時の先生方は、戦争で沢山亡くなりました。なので、当時18歳位の女性教員が来ました。今でも覚えています、名前はムラヤマトミコ先生という先生でした。綺麗な人だったので、皆大好きになりました。昔は、雨が

降っていても傘がありませんでした。でっかい葉っぱがあると、頭の上に乗せて登校してきます。僕のクラスの中に、1人遠くから来る男の子がいました。確か、ノリヒサ君だったかな。その子は、学校に向かう途中に、服がビショビショになってしまいました。その姿を見た先生は、「ちょっといちゃい」と呼び出し、廊下の所をカーテンで仕切って体を綺麗に拭き、自分の着ている物を着せました。今だったら、こんな先生はいないと思います。その時のノリヒサ君はというと、皆の前で、嬉しそうに服をヒラヒラさせていました。なにせ、皆先生が大好きでしたからね、羨ましかったですよ。つまり、先生と生徒っていうよりも、兄弟、友達、親子に近い関係でした。

また、その先生が頑張りすぎて、熱を出して休んだ事がありました。その日は自習になりましたが、学校が終わったら、皆で先生のお見舞いに行きました。皆それぞれお土産を持参して、「先生早く元気になって下さい」と先生を励ましました。先生は、僕達が来たとわかった瞬間、ハッと起き上がりました。そして、皆の顔を見た瞬間、突然泣き出したのです。「うわー！」って。皆びっくりしてね、大人が泣くという事は、よほど辛い事や、痛いか死にそうな時かなと思うわけです。ですので、扉をガンッと閉めて、「先生死んじゃうかもしれん！」と思い、皆で慌てて帰りました。帰り道は皆で「先生、死んじゃうかもしれないよ」とハラハラしていました。

翌日、「もし先生が死んだら大変だ！休んだら大変だ！」と思い、恐る恐る学校に行きました。すると、先生が来ていました。頬が赤かったから、恐らくまだ熱があったと思います。先生は、1人1人の頭を撫でながら、「昨日は、先生の所にお見舞いに来てくれてありがとう。先生あんまり嬉しくて、思わず嬉し泣きしちゃった」と言いました。その言葉を聞いてビックリしました。大人が嬉しい時に泣くなんて、まったく知らなかったのです。ですので、「嬉しい時に泣く」事を先生から教わりました。その後、僕も嬉しい時、涙がぶわーとでます。その時、先生の顔が浮かんできます。

大学を卒業後、僕は小学校の先生になりました。不思議な事に、僕が最初に赴任した小学校にムラヤマ先生がいたのです。彼女は1年生で、僕は3年生を担当しました。いつも、「彰彦ちゃん、ちゃんとやってる？頑張りなさい」と言って教室を見に来てくれました。その先生と出会ったことで、色々な事を教えてもらいました。



ある日、掛け算九九ができない子が、7、8人位いました。その子達に一生懸命教えるのですが、なかなか覚えられません。「放課後、お掃除が終わったら、掛け算九九の勉強をするので、残って勉強をしたい人は手を挙げて下さい」と呼びかけました。皆下を向いて黙ってしまいます。恥ずかしいからですね。ですから、まだ九九を覚えていない子どもの名前を読み上げました。

お掃除が終わって、コの字型に机を直し、勉強を始めました。皆、5の段までは簡単に言えるのですが、6の段からは大変でした。

なんとか9の段まで辿り着いた時、1人のいたずら坊主が、「先生、いつも遅くまで外で遊んでいると、お腹がすくけれど、掛け算の勉強をしても、お腹がすくんだね」と言いました。そこで僕は、皆にラーメンを奢ってあげました。頑張った後のお楽しみという事でね。皆、食べながら喋る喋る。終わる頃になったら、「皆、今日の事は、先生怒られちゃうかもしれないから、内緒だよ。誰にも言うなよ」と言って指切りげんまんして別れました。

翌日、学校に行くと、もう子ども達に話が広がっていて、昨日来なかった子も残っていました。この時点で既に、クラスの半分以上が残っていたのです。そうして、3日目位から、クラスの全員が残ってしまったのです。

4日目位の時、廊下に、人の影が何度も何度も行ったり来たりしていました。おかしいなあと考えていたら、ドアが開いて、子ども達のお母さん達が、7、8人入って来ました。手には、大きなお盆を持ち、その上には、おにぎりや味噌汁、それから、お新香や梅干しがありました。子ども達が、家に帰って色々な話を親にしたのでしょうか。それで親達が連絡を取り合い、おにぎりやお新香を作って持ってきてくれたのです。そうして、皆でおにぎりを食べ、お新香をばくつきながら、色々おしゃべりをするのです。この時、僕は自分が間違っていた事と、すごく嬉しかった事、1つずつ気が付きました。

まず間違っていた事です。僕は教師として、この子ども達をなんとか育てようと思っていました。「僕には責任がある」「子ども達を育てるのは僕だ」「僕が頑張らなきゃ子ども達は育たない」と思っていました。だから、放課後遅くまで色々な物を作ったり、採点をしたりと頑張りました。だけど、この子達は、お父さんとお母さん、近所の人達を含め、沢山人達が育てている事に気付いたのです。この時、皆の力で子どもを育てているっていう事を、ひしひしと感じていました。

次に嬉しかった事です。教室の窓が汚れていたり、ヒビが入っていると、日曜日に、お父さん達やお母さん達が来てくれて、教室を綺麗にしてくれるのです。それから、「雑巾が足りない」と言うと、お母さんたちが雑巾を縫ってくれるのです。要するに、「教育」というのは、教師だけが教えるのではなく、地域の皆でしていたのだという事に気が付いたのです。

この4年後に、僕は通信簿を付けるのが嫌で小学校の先生を辞めてしまいました。辞めた僕は、リュックを1つ背負って、日本中を放浪して歩きました。4年かかりましたが、色んな人達に出会い、支えられました。

30歳の時に、横浜に戻ってきて、当時、横浜市長だった飛鳥田一雄さんが、「これからは、子ども達を大事にする横浜市を作る」と宣言し、1万人市民集會を企画しました。僕は、「この人の元で働きたい」と思い、横浜市の採用試験を受けました。横浜市の採用試験に合格した僕は、日雇い労働者の暮らす寿町の、子ども担当に選ばれました。担当して下さった方達が、僕の事を知っていたので、子どもを担当するには丁度いいのではないかという事でした。

日雇い労働者や住む家を持ってない人達等、路上で寝泊まりする人が多くいるところを「ドヤ町」と言います。何故「ドヤ」というのかというと、「ヤド」をひっくり返すと、「ドヤ」になるからです。「ヤドとは呼べないところ」という意味で、ひっくり返した言葉を使っています。朝仕事を探して、上手く見つければ、その日の泊まる所や食事代を稼ぐ事ができます。仕事が見つからないと、あぶれてしまう町です。こういう町が、東京の山谷、大阪の釜ヶ崎、名古屋の笹島、九州の築港にあります。

横浜の寿町には、「寿生活館」という所がありまして、その、子ども達の担当をする事になりました。日雇い労働者は、1日1日仕事をする事になりますから、なかなか安定した生活が出来ません。だから普通、子どもがいないのです。ですから、山谷も釜ヶ崎も子どもの数が非常に少ないのですが、不思議なことに寿町には女性が多く子どもも沢山いました。夜遅くまで飲み屋が営業していたり、繁華

街があったりして、夜遅くまで、子ども達も一緒に起きていました。なので、子ども達は朝起きれなくなってしまい、学校に行かないという問題がありました。なので、当時、夜遅くまで町中遊び回っている子ども達がいっぱいいました。そこで、その子ども達の対応をする事になったわけです。

寿生活館は、3階建てになっており、その2階を子ども達の空間にしました。そこに卓球やゲーム、本を用意しました。そして「色々な事が出来るからおいで」と、ピラを撒きました。しかし、誰も来ないのです。でも、覗きには来ます。「おいで」と言うと、皆逃げてしまいました。これでは何も進みません。

どうしたら良いか考え、子ども達に「何がしたいのか」「何が嫌なのか」を聞く事にしました。聞きに行く時、子ども達に食べ物を色々と持っていきました。公園に食べ物を持っていき、一緒に食べながら話しを聞きました。

1つ目は、大人がいない事でした。大人が居ると、学校のように先生が居て、教えたり、怒ったりするのが嫌なので、子どもだけにする事。

2つ目は、食べ物がある事でした。家では朝ご飯を作ってくれないので、食べる物がある事。

3つ目は、とはいえ誰か見てくれる人が居る事でした。誰か見てくれる人が居ないと、怪我した時が困ってしまう。だから、若い女の人をつけてほしい。この3つが揃ったら、行っても良いよと言う事でした。

それから、皆と相談して、近所の大学を訪ねて、ボランティアを募り、2、30人の人が集まりました。それから、町のおばさんにも声をかけ、料理やお菓子を作ってくれる人を、何人か来てもらい、お菓子やケーキを作ってもらいました。

準備が整ったので、女子大生8人は、子ども達皆に声をかけて回りました。僕は、入口の外で誰が来たかチェックをしていました。

この取り組みは、あっという間に噂が広がりました。子ども達は、自分の気に入った女子大生の所に集まってきました。自分1人だけの担当者が欲しいのです。本当は、そういう人が欲しいのだなという事が分かってきて、ボランティアをもっともっと増やさないといけないと大騒ぎになりました。

軌道に乗ってきた所で、また、子ども達に何をやりたいか尋ねました。すると、自分達で料理を作りたいという女の子が圧倒的に多かったです。これが、子ども食堂の始まりです。最初は、近くの教会で行われました。貸し出しは、土曜日と日曜日だけだったのですが、だんだん増えてきて、夏休みは毎日やるようになりました。なにせ、完全無料で

すからね。そこに、保健師さんや調理師さんも来てくれて、本格的な食堂が始まりました。

そうしたら、子ども達のやりたい事が次々と出てきました。「野球チームを作りたい」「卓球チームを作りたい」「編み物をやりたい」等、色々と案が出ました。そうなる、そういう先生を地域から探さなければなりません。すると、昔野球をやっていた人が監督になってくれました。しかも、皆がいつも飲んで使ってしまうお金をカンパしてくれたのです。そのお金のおかげで、野球のバットやグローブを買えるようになりました。また、町のおじさん達がユニフォームを買ってくれ、チームの応援にも来てくれました。それを見た大人は、俺達も野球チームを作ろうという話が出ました。不思議ですよ、子どもへの支援をきっかけとして、町の中がどんどん活性化するので。

子どもへの支援をしていたら、こんな話も出てきました。町のおじさん達が仕事から帰ってくると、お酒を飲んで、部屋に1人で寝る生活が続いているから、皆が集まってゆっくり話せる場所が、大人達にも欲しいという話です。という事で、そういう場所を作りました。でも実際に集まってみても、皆なかなか話がまとまらないのですよ。ある時、ワイワイやっていたら、1人のおじさんが、「てめえら何やっている！せつかく、こういう場所を借りて集まったのに、ワーワーワー叫んで！1人が話をしている時は、皆黙って話を聞け！分かったか！でないと、話がまとまん！はい、誰か話したい人」と言いました。そうしたら、出てきたおじさんを見て、皆が静かになりました。黙って見つめるので「あまり考えてねえ」と言って黙ってしまったのです。それで、「話す時には、何を話したいかちゃんとまとまってから話せ。この次から話したい人は、ちゃんとメモ書きをして、皆にわかるように話をする事」という事になりました。すると、字が書けない、読めないという人が出てきました。「じゃあ、勉強会をしよう」「学校を作ろう」という話になり、なんと寿町に識字学校、「あいうえお教室」というのが作られたのです。

この学校で一番人気があったのが、「私の自叙伝」でした。あるおじさんが戦時中、海岸で大砲の弾を埋める為の穴を掘っていました。そこへ敵の飛行機が攻めてきて、周りの仲間が撃たれてしまうのです。飛行機が行ってしまった後、皆で助けるのですが、殆どの人が死ぬ間際、手を握ってですね、「おっかさーん、おっかさーん」と言って死んだというのです。中には、誰かの名前を言って死んでいく人もいたそうです。握っている時は、その人のことを、お母さん、恋人、奥さんだと思って、必死に手を握って力尽きていったそうです。「大丈夫よ、大丈夫よ」と答えると安心

して死んでいく。その話を皆の前でもらいました。そうしたら、日雇い労働者のおじさんが頭の手ぬぐいを取って、涙を拭いていました。そして話が終わった後、「俺とはもう兄弟だ！今日一緒に飲みに行こう！俺が全部おごるから」と、あっという間に仲間になるのです。

ところが、「今度は俺が喋りたい」「今度は俺の人生語らせろ」と言い始めました。中には、オリンピックの選手だったという人がいた事もありました。

他にも、この町で亡くなった人達の為に、盆踊りや夏祭りをやったり、NHKまで頼みに行つてのど自慢大会の伴奏をしていた人を呼んで、のど自慢大会を開催した事もありました。

人と人が繋がる事で、町の中は物凄く活性化しました。つまり、皆知り合っていけばいく程、同じような悲しみや苦しみを知っている人達が仲間になっていくのです。そして、沢山のサークルが生まれました。

沢山あるサークルの中で、「寿住民懇談会」というのを作りました。メンバー4、50人が集まり、この町で皆が「欲しい物」「作って欲しい物」「困っている事」を挙げました。そうしたら、「皆が病気になる時、この町で、タダで見てもらえる医者があったらいいな」と言う声があがりました。僕達は、2千人の名前が書かれた署名簿を、横浜市役所に届けに行きました。すると許可が下りました。場所を貸してくれて、お医者さんの給料、医療費も全部出してくれたのです。でも医者だけは、皆で選ぶことになりました。すると、女の先生が1人、40代の後半だったかな、関心があると行って、引き受けてくれました。

診察は粛々と行われていました。寿町で働く日雇いのおじさん達は、汚れた格好や、お酒を飲んで来る人が多かったので、入口の所に鏡を置きました。すると自分の番の前になると、鏡に映った自分を見て、これでは先生に会えないと、小綺麗になっていくおじさんが増えていきました。

1日の診察が終わると、夜道は危険だからと言って、先生に20人位の護衛が付きました。

あれから40年、僕は久しぶりに先生に会いに行きました。先生は既に引退されていて、車イス生活をされています。僕が、あの時の話をした瞬間、先生はこう言われました。「私は、ずっと医者をやってきましたが、寿町の40年間は、私にとって物凄く大事でした。皆さんが私を大事にしてくれた。こんなに幸せな医者はいません」とおっしゃっていました。その話を聞いて、私はここでやらせてもらった事を誇りに思いました。そして、自分達が本当に必要な事は、皆で話し合えば実現出来るという事を寿町の人から学びました。

また、町の中に夜間銀行を作りました。これは、昼間はなかなか銀行に行けない人の為に、銀行を辞めた方達を中心に作ったものです。

僕もドヤに10年間暮らしました。そこで僕は結婚する事になります。僕の仕事ってきついです。僕は、仕事と結婚どちらをとるかとても悩むようになりました。そんな時、哲学者の西田幾多郎先生のお弟子の森信三先生という方が、「貴方の事を知りたい」とおっしゃって、ドヤに訪ねて来て下さいました。これはすごい事です。僕と一緒にドヤに1晩泊まるのですよ。僕はその時、先生に今悩んでいる事をお話ししました。すると先生は、「貴方のしたい事をしなさい。今しかできない事を精一杯やりなさい。そして、気が付いたら誰かが傍にいるから。その方がご縁のある方ですよ。その為には、その人の事ばかり考えていたら今の仕事は出来ません」とおっしゃったのです。僕はスッキリして、もう寿の町でいつ死んでもいいやと思う位に仕事をしました。

僕はよく、結核患者や皮膚病の人を泊めてあげていました。時には、ゴホゴホ咳きこんだり吐いたりを繰り返す人もいれば、タクシーに乗せてもらえなかった人を、おんぶして休み休み病院に連れて行った事もありました。しかし、僕には病気が移りませんでした。とても不思議なことです。そのような生活を繰り返していく内に、今の奥さんが来てくれて、皆の食事を作ってくれるようになりました。彼女が泊まるには少しきついで、いつも最終電車で帰ってもらいました。その終電まで送っていく10分位の道のりが、2人のデートの道でした。

結婚式は、派手にしたくなかったので身内だけで行いました。でも、森先生にだけは参加していただきました。そんな事で、森先生に会っていなかったら、今の奥さんと出逢えていませんでした。

沖縄大学に行く前、僕は横浜市立大学の教員だったのですが、その時アメリカ同時多発テロ事件が起こりました。僕はそれを見て、全身に鳥肌が立ちました。このままいくと、国と国、文明と文明との戦いになってしまうと思いました。そして、「貧しい人達や、苦しい人達をほっておいては絶対ダメだ！時代が変わらなくてはいけない」と思い、沖縄に行って、もう一度勉強し直そうと思いました。「あの戦争の中で、今沖縄は立ち直ろうとしている。あの人達から学びたい！」そう思い、沖縄行きを妻に相談したのです。すると一緒に行くと言ってくれました。あれから13年が経ちます。僕は沖縄に行って、生きる事の本質を教えてもらいました。



沖縄の離島で暮らしていた時の話を少しします。僕達は、5年間かけて離島を全部周り『海と島の思想』という分厚い本を書きました。その時、生きている上で一番大事なものに気付かされました。それは何かというと、「命」なのです。命が無くなってしまったら生きていると言えません。これも沖縄で暮らしている時に、はっきり分かりました。つまり、人類の発生から現代まで、「命」が繋いでいるのです。だから、今生きている事自体、物凄い奇跡なのです。だって、死んでしまったら後を継ぐ人がいません。誰か1人が抜けても違う人になります。僕はその事を、沖縄で教わってきました。だから沖縄では、子ども達が産まれると、村中がお祭り騒ぎになります。今でも、1年の間に産まれた子ども達を公民館に集めて、村の皆にお披露目をします。また、人が亡くなった時、村中が集まって、おじいとおばあにあやかりたいと、「かじまやあ」というお祭りをして、おじい、おばあに触ります。この命に対する信仰は沖縄の魂みたいなものですね。

沖縄は戦争中、多くの方が玉砕、自決をさせられていました。その時、「自決しないで逃げよう」と言って助かった人達もいます。その人達から話を伺うと、「あの時、おかあやおばあがいなかったら今の私は無い、だから命は大切にしたい」と多くの方がそうおっしゃられます。僕はこの事を教えてもらいました。

沖縄大学の教員を辞める時、『生きること、それがぼくの仕事』という本を書きました。執筆中、ジャーナリストだった友人が、脳梗塞になり倒れてしまいました。そして友人は、仕事が出来なくなりました。奥さんが一生懸命作ったご飯も食べず、寝たきりの状態の中、生きる希望を失ってしまいました。奥さんも、「少しでも食べてくれたら安心なんだけれど」と悩み苦しんでいました。僕は彼に電話をし、「奥さんが、一生懸命作ってくれた食事を食べる事が、君の仕事かもしれないよ」と言いました。すると彼は、奥さんの作ってくれた食事を食べてくれたのです。そうしたら、

奥さんが涙を流して喜んでくれました。その後、彼から「やはり、俺の仕事は食べる事かもしれない。俺は今まで、妻の事を気にせず生きてきたが、食べ物に口にしたらとても喜んでくれた。死にたいと思っていたが、『生きる』という事は、他の人が喜ぶ事をしてあげる事なのだろうな。金を稼ぐ事だけが仕事だと思っていたが、食べる事、眠る事、リハビリをする事、これも俺の仕事だ。生きる事そのものが仕事なのだ」と言って、僕よりもっと深いところを彼は掴んでいました。生きている事そのものを喜んでくれる。介護される方が、受け身だと思うのではなく、介護をする人がむしろ育て応援してくれている。全ての命を大切にすることがとても大事です。

「イチャリバ・チョーデー」という沖縄の言葉があります。「出会ったら、皆兄弟」という意味です。若い頃沖縄に居た僕は、さとうきび畑の中で道に迷ってしまいました。その時、近くに働いているおじさんが居たので道を聞きに行くと、仕事を放り出して一緒についてきてくれました。そして、その日の目的地は那覇だったのですが、「那覇まで遠いな。家そこだから、今日は泊まっていけ」と言ってくれ、泊めてくれました。1つ1つの出会いが、人間関係を作るのですね。

沖縄は戦後、皆都会の那覇や東京、大阪等へ人が出ていってしまいました。そのため、島の人口がどんどん減っています。では、人口減少を食い止めるにはどうしたら良いのでしょうか。その時に出たのが、「里親制度」を活用する事でした。実際、「鳩間島に暮らしてみたい」という子どもが4人暮らす事になり、島は賑やかになり小学校が復活しました。

沖縄の多良間島という島の運動会では、子どもからお年寄りまで島に住んでいる人全員が参加します。子ども達だけだと人数が少なく成り立たないからです。だから老人会の人達も、一緒になって走るわけです。また、もし島に住む親御さんが、事故で亡くなった時や、身寄りが無くなった時に活用出来るよう、仮親制度が沖縄にはあります。島全体が子どもを育てるのですね。

さて、沖縄の話から少し離れますが、地域の主人公は誰でしょうか。その地域に住んでいる人皆が主人公ではないかと思えます。大人達の多くは、別の場所に行って仕事をし、夜に帰ってきます。つまり、真の主人公は「子ども達」と「高齢者」です。子どもは、幼稚園、保育園、小学校、中学校が自分達の住む場所にあれば、そこに行って帰ってきている訳ですよ。それから高齢者は、どこか別の場所に務めていなければ、地域に暮らしている訳です。ですから、この人達を軸にしない地域づくりはまずありえません。また、子ども達の世話や、お年寄りの介護をしている人、

学校の先生、仕事として通ってきている人も含め、地域の中のケアをする人達の視点も外せません。だから、その人達が地域の中で、「何をしたいのか」「何をするのか」って事を、皆で考えないといけなと思います。もう1つ大切な主人公は、商店を営む人です。かつて、商店の人達は、地域の中で皆がお互いの利益や物を交換し、交流をしながらお金を循環していました。しかし、大きなスーパーが出来てしまうと、皆そこに行ってしまう、小さな商店がなくなってしまいます。やはり、小さな商店をもう1回復活させることも、大事な事ではないでしょうか。

命の話から、少しご先祖さんの話をしようと思います。十数年前からあった加藤家のお墓が、そうとう傷んでいました。そこで、墓を自然のままで作直そうという事になりました。やはり僕らも、このまま皆と一緒に入ろうかと家族で話し合っ作ってもらったのです。僕らの先祖は昔、死んだら地域の川、山、森、池に帰っていったのです。自然そのものが自分達の分身だったって事です。

沖縄には霊的にとても強い巫女さん達が沢山いました。木を切られる時、自分が切られる様に、身をよじって泣くのです。その前に、「家を建てる為に使わせて頂きます、よろしくお祈りします」と皆でお祈りをして、水を掛け、歌を歌ってから切る、こういう事をしていました。自然環境を、沖縄ではとても大切にしているのですね。

今、「生きる事の意味」を問う時代がきていると思います。今は、物やお金がある事に豊かさを感じるようになってしまいました。しかし、一番大事なものは命です。人間だけでなく、他の動植物も含め全ての命を大事にしなくてはなりません。もしそれが傷つき、苦しんでいたら、お互いにケアをし合う必要があります。これも沖縄で教わったのですが、「チムグリサー」という言葉があります。「チム」は心臓、「グリサー」は苦しいです。ようするに、他の人が辛い思いをしている時、自分も苦しくなるから何かしてあげたい。これは沖縄の人達の本質的な考え方みたいなものです。

僕が沖縄大学の教員になった時、耳が両方とも聞こえない学生が本土から受験してきました。その人は、修学旅行で沖縄に来た時、ここで暮らしたいと思ったようです。僕はその人と、文字を紙に書いて会話をしながら面接を行いました。とても明るい青年でしたから、先生方にも相談し合格を出しました。

その後、僕の最初の授業で彼を紹介しました。その時、彼を応援してくれる人がいないか聞いたところ、あっという間に30人も手を挙げてくれました。授業が終わったら、皆周りに集まってきて、トイレの案内や食堂の案内をして

くれました。その後どうなったかと言うと、ノート提供の為の講座を作ろうという事になり、ノートテイク事業が出来ました。生徒は約100人位集まり、その中には、耳が少し不自由だと言えなかった学生が、沢山の事がわかりました。その後、障害者サークルが出来て、彼は委員長になりました。しかも、沖縄県の中途障害者達のサークル代表にもなりました。その頃彼は、各小学校に行き、自分の体験を一所懸命手話と映像を交えて説明していました。これはちょっとびっくりしました。

今、超高齢社会に差し掛かっています。どういう時代を作っていきますか。生活協同組合は、『2050年の高齢社会の構造』という本を作りました。僕はこの本を読んで、高齢者にとって地域に必要なものって3つの要素があると分かりました。

1つ目は、そこに行ったら色々な情報が分かる事。要するに「相談に乗ってくれる場所」と、「情報がある場所」、その人が知らなければ、「他に連絡を取って調べてくれる場所」です。

2つ目は、そこに行ったら食事がとれ、日用品等必要な物が手に入る事。

3つ目はフリースペースです。子どもからお年寄りまで、いつ行っても何をしても良い場所。この3つが絶対に必要だと書かれていました。この条件を備えた場所を、「つどいの館」という名前にし、これを全国の各小学校区に1個作る予定です。運営は、70代の人達に活動して頂きます。

彼らは、相談や販売、お茶くみや学習会等色々な事をしています。また、それを朝から夜までやると大変ですから、月、火はこの人とか、1週間に1回だけとか色々な場合があります。もちろん給料も支給され、地域ごとに変ります。それでも25人から100人位の人がここで働いてもらう事が出来ます。すると、ここでの情報、地域の情報を知る事が出来、顔見知りにもなります。そうして、70代の皆は、知らないうちに地域に関して大ベテランになります。

それからもう1つ。実は子どもの問題で、学校が一番のネックになっています。子ども達にとって、学校は本音で話す事ができない、喜ぶ事ができない空間になりつつあります。新聞にも掲載されていましたが、横浜のある中学校の話です。東日本大震災の後、ご家族で横浜の小学校に避難してきました。今は、中学1年になりましたが皆から「福島菌」と言われ、いじめられていました。お金まで取られていました。「もうこのまま死にたい」と手紙に書き、何度も教育委員会や学校に訴えていました。今回、たまたま表に出て調査委員会が入りましたが、あまりのひどさにびっ

くりしました。こういう事を敏感に感じ取れない学校になってしまったのです。ですから僕は、自分が出た小学校をコミュニティスクールにしたいと思っています。また、高齢者の老人クラブで新聞を作ろうと思っています。僕は、ニュース担当に選ばれたので、1人1人お年寄りの人生を、写真と一緒に載せていく予定です。また、地域の色々な出来事なんかも載せていく予定です。その配布を、小学生にお願いしようと思っています。子ども達を何人か組にして、地域のお年寄り1人1人に、新聞を持って行って頂くと思っています。訪ねていくと、「上がってお茶でも飲んでいけ」というお年寄りがいると思います。子ども達が「地域のお年寄りの事を知る」事が出来、逆に、地域のお年寄りが「子ども達の事を知る」事が出来る。そのような形を作りたいです。

この間、僕は岡山県の津山市に勉強会へ行きました。歴史的に非常に豊かな伝統のある町なのですが、3年前から「じばこの家」を作っています。「じばこの家」というのは、「おじいちゃん、おばあちゃんと子どもの家」という意味です。これは、地域にあった古い旅館を修復し、そこで寝泊りが出来るようにしたのです。今5人の美作大生が泊まっています。1ヵ月5千円で泊まる事が出来ますが、条件として会館管理のボランティアを行う事があります。何をを行うかといいますと、まず学生がいつでも誰でも来られるよう、食事や日用品を揃えます。そこに、子ども達やお年寄りがやってきます。これだけで、物凄い交流が出来ます。

では最後のお話をします。東日本大震災があった時、「ロシナンテの会」というボランティアグループがありまして、そのグループの閉校式に参加してきました。その時、「この町はどういう町にしたいか」という事を、ボランティアと地域皆で話し合いをしていました。結果、「きょういくのある町」「きょうようのある町」を合言葉にしようという事になりました。ずいぶん古めかしい事言うなと思ひまして、どういう事か尋ねました。すると「きょういく」は、「今日行くところがある」「今日行く場所がある」、「きょうよう」は「用事がある」「自分のやる仕事がある」、つまり「皆がお互いに役割を決め、安心して集まれる居場所を作ろう」、これが復興の合言葉です。僕は神奈川県で、この合言葉を流行らせようと思っています。

今日は、長い時間お話をさせていただきありがとうございました。皆さんが実際にやってみて、色々な事をお感じになっていると思います。皆さんの知恵を集めながら、これからも色々勉強させていただきたいなと思っています。どうもありがとうございました。

質疑応答・議論

<コーディネーター・神谷先生>

今から、質疑応答の時間に移させていただきます。加藤先生にご質問、ご感想がある方は挙手をお願いいたします。

<質問者 A >

松戸市の岩瀬で役員をやっている者です。高齢の男性は、なかなかこういう自治会等のボランティア活動に参加しないなと実感しております。逆に、高齢の女性はお友達が沢山いるので色々なものに参加しています。簡単に申しますと、どうしたらリタイアした男性を引っ張り込めるか、知恵があったら教えてください。

<加藤先生>

男性は、仕事ばかりで地域に友達が少なく、なかなか外に出られないという方が沢山いると思います。

<質問者 A >

恐らく、リタイアした人は地域を知りませんし馴染んでもいないと思います。横の繋がりもないという事もあります。私も、サラリーマンを40年やってきました。しかし、今は地域に馴染んだ為、サラリーマン時代より友達が沢山出来ました。

<加藤先生>

本当にそうですね。僕もね、これは全国的に同じ傾向だと思っています。要するに、子ども時代は地域に馴染めるのです。しかし、私立に行ってしまうと離れてしまいます。

今度、小学校の同窓会を開きます。昔の事を思い出しますから楽しくなってきました。同級生1人1人に訪ねて歩いてきました。でも、来てほしくないと言う家もありました。体験が皆違うのです。中には、脳溢血で倒れ外出出来ない人もいました。しかし、彼は小学校時代の仲間達と出会って、当時の思い出を話しながら、これまでの人生をお互いに聞き合ったりしている内、お茶飲み会に出られるようになりました。

男性の場合、地域にあまり関わりたくない人が多いです。仕事を中心にして動いていますから。また、受け身の生き方になってしまいます。言われた事をやるので、自分から何かをやるという経験があまりないのです。なので、いつの間にか本音を言えなくなってしまうのです。女性の方は、結婚したら地域と一緒に関係を持たないとなかなか出来ないところがあります。そういった意味で、人付き合いをしていく内に皆さんと親しくなり年を取ってから生き生きします。

男性はどうするか。先程、新聞を発行すると言ったのは、町内で色々な活動を行っているからです。その中で、公園を率先して掃除している方が数人いました。そこへ僕も行き、一緒に草取りや溝を流しました。そこまでは良いのですが、終わった後皆そそくさと帰ってしまうのです。僕は、沖縄から買ってきたお菓子等を持って行き、終わったらお茶会をしました。そうしたら今度は女性が来て、家にあった漬け物や家で作った物を色々持ってきて、一緒に掃除を手伝ってくれるようになりました。今は人数が増えて、今度食堂を借り切って忘年会をやろうという事になりました。今じゃ、掃除の後が楽しみにになりました。

自分がずっと内に秘めた思いを言えない事ってあるでしょ。それが溜まってしまうと燻ってしまい病気になるます。それを出すとずいぶん楽になれます。聞いてくれる相手がいれば、尚更楽になったりするのです。また、嬉しい事を話す時「やった！良かったね！」と言ってくると、嬉しいが2倍に増えます。人数が多いと、話した事が皆に染み透っていく気がします。

実は「話し合い」って、人を勇気づけるのです。聞いた方は「そういえば、自分もこんな事で辛い事あったな」と思い出し、話し合いをするたびに新しい自分の記憶が戻ってきたり、忘れていた事を思い出したりと、どんどん豊かになっていくのです。だから、「話し合いの場」は物凄く大事な事なのです。

ただ、今までバリバリ仕事をやってきた人がそこに来ると、その肩書が外れてしまいます。僕の近くに「ふくろうカフェ」というのが始まりました。今5年目なのですが、仕事を辞めた役所の人や国家公務員等色々な方がいます。この間そこに呼ばれました。僕は、人と話をする時に、その人の前の肩書は無理に聞かないようにしています。まあ、自然と分かっちゃいますからね。だって話をしていると、その事に詳しいのだから。

もう1つは、その方が誇りにしているものを、地域に活かすようにしたいのですよ。そこで、子ども達に歩いて配ってもらおうと思っている物が「1人1人の記録」です。

以前、ケアプラザという所で「聞き書き隊」というのがありました。聞き書き隊は、元々井上ひさしさんが、色々な人から聞いた話をまとめ、冊子として作った事が始まりです。その後、小野さんが中心になって各地に拡げました。やり方は、1人1人が自分の人生体験を語り、テープを起こして小さな手作りの冊子が出来上がります。また、話し言葉をそのまま残し、その人が持っている写真も間に入れ込みます。それを見た人が、自分の子どもや孫達に配りたいと言って20冊増刷してくれと言う人もいましたし、そ

の冊子を読んで交流が増えることもありました。そうすると肩書ではなく、その人の得意とするものが地域の中で生きていくのです。そういう事がわかって、地域の「達人探し」を今やろうと思っています。

また、聞いた事をニュースにまとめて載せ、それを見た皆が「話を聞きたい」と言ったら、家を訪ねてその人の人生について話を聞きに行きます。その冊子その人が見せたいという事であれば、土曜日の午後、「話を聞きたい」と思った子ども達を小学校に集め、地域のおじいとおばあのやっていた事を聞く講座を作りたいです。来年位からやろうと今計画を立てています。

僕がさっき言った、子ども達が新聞を届けに行く事をお願いしようと思うのは、子どもと出会うとお年寄りの目つきが変わるからです。そして、その子を自分の孫のように思い、いつまた来ても良いように準備をするようになるのです。子どもとお年寄りが組む事によって、ちょっと頑固で照れ屋のおじいちゃんも、それを乗り越えて外に出ていく事が出来ると思います。

今、全国の老人クラブの実践録を集めていますが、あまりないです。私のところでも、老人クラブを上手く活用して体験談をもまとめられたらいいなと思っています。なので、皆さんも自分の体験記を一度まとめてみて、それを皆さんに伝えてください。

<コーディネーター・神谷先生>

ありがとうございます。他にいかがでございましょう。

<質問者 B>

以前、多世代交流の研究を行ったことがあります。その時、高齢者と子どもの間にいる世代が、思ったよりも多世代交流に関心を持っていませんでした。高齢者と子どもを繋ぐ為には直接繋いだ方が良く思っていて、それには学校の先生と手を組んだ方が活性化すると思っています。そういう人と人とをうまく繋ぐコツがありましたら教えてください。

<加藤先生>

実は、震災や台風で甚大な被害があった場合は、学校に避難する事になっています。その時、一度も学校に行った事がない人は、どこに保健室やプール等があるかわかりません。なので、学校を日常的に開放して欲しいと思っています。

1つ目は、子ども達と触れ合う機会を作る事です。その為には今度、空き教室を地域の人が利用できるよう開放し

てもらい、週1回、老人会を開催し皆で集まろうと思っています。また、日常的に学校に行く時間を作り、子ども達が活動する時間を作ってもらって、一緒に交流出来ればいいなと思っています。例えば、子ども達が体育の授業をしている時、僕たちは庭の片付けや掃除をします。その時、子ども達に声をかけ顔見知りになろうという作戦です。

2つ目は、学校の見張りです。学校では、校舎内に不審者が入ってこないよう鍵を閉めます。また見張りをつけます。そのため、週の何回か高齢者のグループや老人会から2人組みを作り、時間帯によって立ち合いをしようと思っています。どの位の方が応援にきて下さるかかわからないので、来て頂ける時間帯を決めようと思っています。そうすれば、教室の中を行き来する事が出来るようになります。

3つ目は、コミュニティスクールを作る事です。地域だけでも学校の対応がなかなか難しいという事で、地域の高齢者グループの力も借りて、一緒に授業や行事に参加出来るような形を作って顔見知りになりたいと思っています。そうすると、授業を先生だけがやるのではなく、地域の方や農家の方も集まって見てあげる、そういう触れ合いの時間をどんどん作りたいですね。

4つ目、見守り隊です。子ども達の安全を守るため、登下校の際、学校長から見守り隊をやってほしいと言われました。校門の入り口は皆見えています、学校の外は誰もいません。そのような場所に立ち、子ども達が無事に迎り着けるか見守るのです。服装や腕章が決まっています、それぞれ自分の家の近くを見て回ります。その時、名前が大きく書かれた名札も付けておくと、名前を呼んでもらえます。子どもの名前がわかると、知り合いになった感じになります。町でも時々見かけた時は、すごく嬉しそうに手を振りながら名前を呼んでくれます。

小さな事ではありますが、とても大事な事だと思います。徐々に成果を積み上げていき、地域の方達とお年寄りが上手く行く方法をいくつか作ってみたいと思っています。

<コーディネーター・神谷先生>

そういった部分を今後提案していくのですね。では、他にご質問のある方、いらっしゃいますか。

<質問者C>

現在、自治会の子ども担当しております。今、少子化で子どもの数が少なくなっていますが、休みの日には公園で遊ぶ姿や、イベントを開催すると子ども達が沢山集まってくる光景を見て、「まだまだ子どもって沢山いるな」と思いました。

しかし、何か行事を催すにも個人情報の取り扱いが難しいです。以前は、小学校に入学する子ども達に、町会からノートをプレゼントしていました。しかし、今ではそういう情報もなかなか入ってきません。また、「こんにちは」と挨拶をしても不審者扱いをされてしまいます。

そのため、「何か行事をやりたい」「子どもを集めて何かやりたい」と思っている、どうしても突発的な集まりになってしまいます。どこか切り口があればと思っているのですが、いかがでしょうか。

<加藤先生>

時々、イベントを催す事も良いですが、上手く繋がらないです。やはり、自分達が日常的に集まる事が必要です。

「子ども食堂」は面白いと思いますよ。重要なのは、「食事が取れない子ども達」というような言い方をしてはいけません。誰が来ても良いが、200円を持ってきてもらう。しかし、それでもお金を払えない子どもはいます。その時は、お手伝いをしてもらって食事代をタダにします。そうすると、早くから来てくれて、皮むきやお皿を用意する等のお手伝いをし、食事をして帰ります。もちろんその子は恵んでもらった訳ではなく、「自分が仕事をした」という事になります。すると、ここに来てくれる子ども達は多くの人と出会い、どんどん知り合いが増えていきます。沖縄ではこのようなシステムになっています。

昔は自分の家を、図書館のように開放している場所があったかと思います。今はなかなか難しいかもしれませんが、地域の中に子ども達が簡単に集まって来られるような場所がありました。実際に、とある学校の先生がお辞めになるという事で、家族と一緒に自分の家の1部屋半を、子ども達の居場所スペースとして開放する人がいました。そこに通っていると、どんどん友達や仲間が増えていきすぐ親しくなれます。すると、いつの間にか、その子が芋づる式に繋いでくれます。だから、自分の家を開くのがとてもいいですね。そういう日常的に出会えるような空間を地域に作ってみてはどうですか。

<コーディネーター・神谷先生>

最後ご質問がある方、いらっしゃいますか。コメントでも構いません。

<質問者D>

私、小金原地区の大きな団地に住んでいます。その地区で、最近始まったのが「子ども食堂」なのですが、それを行っている場所が居酒屋なのです。昼間は営業していない

ので、その時間を使って子ども達に来て頂いています。

しかし、「子ども食堂」は、原則として、母子家庭のお子さんをベースにしています。でも、それを表立って出していません。何故かという、いじめに繋がる可能性もあるからです。とって、これではあまり宣伝が出来ません。子ども食堂を少しずつ広め、子ども達の居場所作りに繋げたいのです。

そこで、今日のお話に出たと思いますが、私達もお年寄り、もっと繋がる事が出来ないかと考えています。私達は5、6年活動をやってきましたので、横の繋がりが出来てきました。ですから最近、話し合いをした後、必ず反省会をやるという意見が出てきました。この取り組みを通して、お父さん同士がもっと繋がって行けたらと思います。

また、私もつい先日、生涯学習の講演会でお話をする機会がありました。今の防災に関する事で、横と繋がる事はとても大事だという話をしました。ところが、生涯学習の生徒さんの8割は女性だったので、横の繋がりの話をして「私達は元々繋がっていますよ」という感じでした。しかし、やはり地域に父親、お年寄り、若い方がいないと無理です。先生のお話を聞いて、70代の方と横の繋がりを上手く作っていくと、もっともっと地域が活性化してくるのかなと考え始めました。

<コーディネーター・神谷先生>

また、こういう機会が持てるよう皆さんに是非ご参加頂いて、この聖徳大学から発信したいという想いで今日の講演会を企画しました。今日、お集まり頂いた皆さんのところから、広がって行けたらいいなと思っております。私も努力する事をここにお誓い申し上げ閉会とさせて頂きたいと思えます。皆さん本当にありがとうございました。

加藤彰彦 近著

・『子どもとつくる地域（まち）づくり：暮らしの中の子ども学』学苑社

野本三吉 著

・『貧困児童：子どもの貧困からの脱出』創英社／三省堂書店

加藤彰彦 著

・『〈繋がる力〉の手渡し方：離陸の思想、着地の思想』現代書館

野本三吉 著

